

『学会見聞記』

第8回アジア脳腫瘍学会に参加して
8th Asian Society of Neuro-Oncology: ASNO,
Suzhou, China, May 26-29, 2011

古 田 拓 也

金沢大学大学院医学系研究科
脳・脊髄機能制御学 博士課程1年

2011年5月26日から5月29日にかけて中国は蘇州で開かれた第8回アジア脳腫瘍学会に参加させていただきました。蘇州は上海から西へおよそ100kmに位置しており多くの湖や運河があり東洋のベニスと呼ばれる美しい街です。日本、中国、韓国、台湾、インドなどアジア各国から多くの脳腫瘍研究者が集いました。小松から上海への直通便に搭乗し初めて中国の地に降り立ちました。しかし、空港で待っているはずの学会関係者が見当たらずどのバスに乗るのかわからないというトラブルに早速見舞われました。なんとか合流できたものの、空調の壊れたぎゅうぎゅう詰めの車に3時間あまり揺られることとなりました。しかし着いた学会会場は5つ星の高級リゾートホテル。さすがは国際学会と驚愕しました。

病棟業務のかたわら10分間の英語での口頭発表の準備を進めてきましたが、やはり準備不足は否めません。到着した日の夜はスライドと原稿の最終チェックを遅くまで行い、そのまま寝てしまいました。翌日、いよいよ開会。朝8時からスタートの予定でしたが、会場は人もまばらで始まる気配がありません。30分遅れで会長の挨拶、各国の招待VIPからの挨拶を延々と(?)聴いたあとまずは教育講演が始まりました。脳腫瘍研究に関するこれまでのレビューから最新の知見まで、先のVIPを含め各分野の先駆者によるとても興味深い講演を聴くことができました。午後からはSurgery, Chemotherapy, Pathologyの3つのセッションに分かれそれぞれ別の会場で進行しました。私の出番はPathologyセッションのほぼ最後で長い緊張の時間を過ごしました。演題は“The association between recurrence pattern and impaired blood flow around the resection cavity due to the glioblastoma surgery”で、悪性脳腫瘍の術後に生じる摘出腔周囲の脳梗塞部分からは腫瘍は再発しないというものです。発表自体は練習通りにできましたが、質疑応答に入ると完全に動転してしまい自分で何を言っているのかまったくわからなくなりました。幸い座長が日本人の先生だったのでうまくまとめてくださり初の国際学会での発表を無事に終えることができました。今回

の学会で一貫して痛感したのは、自分にとっては言葉の壁が非常に高いということです。日常英会話もままならない状態では学会での質疑応答は当然のごとく困難を極めました。今後の研究に対するモチベーションが上昇したと同時に自身の語学のレベルアップを誓いました。

学会以外では観光を堪能させていただきました。蘇州市街においては英語がまったく通じず料理の注文やタクシーで行き先を伝えるのに大変苦労しました。苦労の甲斐あって食べた上海蟹はとてもおいしく、行き着いた世界遺産である虎丘塔はとても荘厳でした。最終日に上海に立ち寄りしましたが、万博の影響もあってか東京や大阪に勝るとも劣らない都会ぶりでした。19世紀末に建てられた英国風建築物から近代的な高層ビルまで歴史を感じさせる街並みでした。あまりに広大でほんの一部しか見て回れませんでした。足が棒になってしまいました。言葉の問題に直面し行き当たりばったりの観光を終えて無事日本に帰り着いたときの安堵感は言葉では言い表せません。

最後にこのような貴重な学会参加の機会を与えていただきました当教室の濱田教授をはじめ医局、病棟スタッフに心から感謝を申し上げます。

